

発達障害児に対する放課後活動「A c t .」の実践報告

—実践の意義と持続可能な運営のための工夫—

佐々木 全* ・ 伊藤 篤 司** ・ 今野 文 龍***

(2015年9月1日受付, 2015年12月25日受理)

1 問題と目的

近年、子どもたちの健全育成のために、放課後や休日における地域生活の充実の必要性が指摘され、全国各地で多様な取組みがなされている^{1) 2) 3)}。このような活動は、当然ながら障害の有無や障害種を問わないテーマである。

しかし、LD, ADHD, アスペルガー障害等いわゆる発達障害の子どもにおいては、既存の活動、例えば学童保育、学習塾、スポーツ少年団などに馴染みにくいことが少なからずあり、その補完的な活動の場が必要だったり、むしろ積極的な適応の場としての活動が必要だったりする。これらの事情に対応して、親の会や専門家グループなどの支援団体が放課後活動や休日活動を企画し提供する実践がある。岩手県内においても、このような支援団体は複数あり、それぞれに療育や訓練、あるいはレジャーや交流という生活自体を目的としている^{4) 5)}。

このような市民団体の活動を巡っては、その実践の意義を検討しようとする「実践論」と、その実践を持続するための運営方法を検討する「運営論」が必要である^{6) 7) 8)}。特にも、「運営論」に関しては、近年、全国各地の親の会等の支援団体における運営上の悩みが顕在化しており、重要視される^{9) 10) 11)}。岩手県内でも、いくつかの支援団体において、持続不能状態に陥ったり、過重な努力によってようやく持続したりしている状況が散見される。それゆえ、持続可能な運営に関する知見を相互参照可能な情報として共有することが役に立つだろう。本稿は、その一環として「実践論」と「運営論」を包括的に検討する事例研究である。具体的には、放課後活動「A c t . (アクト)」を事例として、その実践の意義と、持続可能な運営のために施した工夫点を明らかにすることを目的とする。

2 方法

本稿では、「A c t .」の運営に関する資料を収集し、それに基づき、次の観点ごとに情報を

* 岩手大学教職大学院設置準備室

** 岩手県立宮古恵風支援学校

*** 秋田県立横手特別支援学校

整理した。すなわち、①立ち上げの経緯、②実践状況とその評価、③運営状況とその評価である。その上で、活動の意義と、持続可能な運営のために施した工夫点を考察した。

収集した資料は、運営事務にかかわる記録簿、既に公開されている実践報告等（本稿末尾にて掲げたもの）である。記録簿には、2010年度～2012年度までの3年分であり、参加児名簿、年度の計画、会場の借用などの事務手続き書類、参加児童の様子に関する情報交換記録、毎回の活動における計画や実施後の反省記録、活動の評価にかかわる保護者アンケートの回答が含まれた。なお、保護者アンケートは、2010年度末実施のものであり、活動に引率した母親5名を対象とした悉皆調査だった。実践の意義を確認し、かつ2011年度以降の活動の持続を検討すべく実施した。質問項目及びその回答は表1に示した。

3 結果

(1) 立ち上げの経緯

第一筆者は2008年当時所属の県立特別支援学校において、センター的機能に従事し、盛岡近隣地域の通常学校等の巡回相談を担当していた。そこで、学校で不適応状況にある発達障害の子どもたちと出会った。その一人がナオヤ君（仮名、当時小学4年）だった。幼児期にはADHDの兆候が顕著だったというが、学校生活では従順であり、むしろ過剰適応的であった。例えば授業中、「よい姿勢」を指示されると、全身全霊を傾けてそれを実行し続けようとする。結果、学校生活に疲弊してしまい、登校を渋るようになっていた。学校、家庭共に最善を尽くしながらも不適応状況が解消されず膠着状態にあたり、放課後や休日が空白時間となり、ナオヤ君自身も不本意に思いながら無為に過ごしていたりしていた。学校生活、家庭生活、地域生活という三つのライフシーン¹²⁾を俯瞰したときに、放課後・休日の生活の手当てが必要または有望と思われた。しかし、既存の活動においては、過去の挫折経験も手伝って選択肢がない状態だった。ナオヤ君の個別的な事情についての理解と支援が得られるような活動を求めたかった。

まず、第一筆者は、盛岡近隣地域において活動する支援団体の紹介を考えた。居住地域からして、選択肢には二つあった。その一つが月一回の休日活動を開催していた「エブリ教室」だった¹³⁾。これは、筆者らが運営する支援団体であり、最有力候補であったものの、当時は参加児童が多く、ナオヤ君の受け入れができない状況だった。また、活動頻度がより多い方が、ナオヤ君にとって生活のリズムになりやすく、発散的な効果もあると思えた。

もう一つの選択肢は「なずな教室」であり、受け入れが可能な状況があったために、試行的な参加の機会を設けた。なずな教室は、週1回金曜日に放課後活動を提供する唯一の活動だった。そもそも、なずな教室は、1987年に加藤義男岩手大学名誉教授（当時、岩手大学助教授）の臨床活動の一環として立ち上げられ、2015現在まで持続的に開催されており、岩手県内各地における支援団体のルーツとなった^{14) 15) 16)}。この活動への参加を検討したものの、ナオヤ君の家庭にとっては交通手段や活動時間などの状況から参加しにくいとのことだった。

そこで、第一筆者は、2010年に第二筆者（当時、岩手大学大学院生）と新たな放課後活動を構想し、立ち上げることにした。なお、2011年には、第三筆者（当時、岩手大学学生）が加わった。

第一筆者は、ナオヤ君と同様の状況にある子どもたちで参加を募り、6名の参加者を得た。

発達障害児に対する放課後活動「A c t .」の実践報告

その内訳は、ナオヤ君の他に小学4年女子、3年男子2名、2年女子1名、1年男子1名だった。なお、2011年度、やむを得ない家庭状況によって1名の参加取りやめがあったが、同時に1名の新規参加があった。

活動名は、「Afterschool（放課後）をCho（超）Tanosimo（楽しもう）！」の頭文字を取り、参加の子どもたちがActiveに活動できるようにとの願いをこめて、「A c t .」と名付けた。

（2）活動の状況とその評価

活動の状況について、以下のように整理し、筆者らスタッフによる自己評価と、保護者アンケート回答による評価を付した。

① 活動の目標

活動の目標は、参加者の放課後を、楽しくやりがいのある時間にすることである。そのために、次の3点を必要要件として位置付けその実現をめざす。すなわち、①確かな目当て・見通しを持ち仲間とテーマを共有すること、②一人ひとりが自分の力で活動し仲間と共に取り組むこと、③存分に活動し、満足感・成就感を分かち合うことである。これら3点は、知的障害教育における学校生活作りにおいて提言されているものである¹⁷⁾。これは生活上の目標でありながら支援方針を規定する内容でもあり、エブリ教室において支援活動における目標論として再構築された¹⁸⁾。放課後活動としての趣旨にも相応しいと判断し「A c t .」でこれを採用した。

この目標は、ラグビーを活動内容とすることを踏まえ、プレーンにおいてはそれぞれ次のような目標表記「ねがい」として具体化された。すなわち、攻守それぞれのプレーンにおいて目的的にプレーしてほしい、②自分の力を存分に発揮して首尾よく、そしてチームとしての連携よくプレーしてほしい、③プレーの成功と失敗に伴う葛藤をも含め、チームメイトと共に分かち合っしてほしい、である。

これらのねがいは、さらに一人一人の参加者の活動の様子に即して個別化された。この内容は、スタッフ間で話し合わせ、口頭で共有された。ラグビーにおける実際のプレーにおいて反復的、参加者自身にとっても自覚的に繰り返されるものであり、個別の支援計画として体裁はとらなかったものの、スタッフの記録メモや保護者への伝達メモなどに記録が残された。これについては具体例を後に記す。

さて、活動の評価として、保護者アンケートの回答から該当箇所を挙げる。保護者には次の3つの質問項目をもって尋ね、以下のような回答を得た。

第一に、「質問項目：A c t . に参加してよかったですか」ともって尋ね、全員の賛同を確認できた。その理由として「同じような性質の子どもたちと楽しい時間を過ごせた。（親も）」、「安心してスポーツを楽しめた」、「走ることがあまり得意でないのに「A c t .」では楽しそうに走っていたし、毎回楽しみにしていた」などの回答を得た。

第二に、「質問項目：A c t . に参加される以前、お子さんの、放課後の生活の様子は、いかがでしたか」と「質問項目：A c t . に参加されてから、お子さんの活動日や活動時間の前後の様子はいかがでしたか」ともって「A c t .」開催前後の変化を尋ね、次のような回答を得た。

「A c t .」開催前では、「体を持ってあまし、遠くまで出かけてトラブルがあった」、「学校生活に適応できずに悩んでいたため放課後も疲れから家の中で一人で遊んでいた。生活にメリハリがなかった」、「体を動かして遊ぶことはめったになかった。家に帰ってすぐ宿題を始めても、集中して勉強できないのでだったら23時頃まで続けるときもあった」、「帰宅してもテレビ、

ゲーム、読書、絵を描くといったことばかりで、体を動かす機会がほとんどなかった]、「なかなか活動できる事や場がなく自宅で過ごすのみだった。周りの活動についていけなくなっていくにつれておやつを食べたがるようになった」とのことだった。

[A c t.] 開催後では、「(A c t. の活動が) 待ち遠しいようで生活にメリハリがでてきた]、「次の活動が待ち遠しくてたまらない様子で、あと何日と、指折り数える毎日だった。A c t. に行くために学校もがんばって行き、宿題も終わらせると自分から(出発の準備)行動した。翌日は本当に元気に登校する姿が見られた]、「A c t. の日は帰ってすぐ宿題を始めるのですが、楽しみにしているからか、集中して早めに終わらせようとがんばっていた]、「A c t. に参加し始めた頃は宿題を終えてから出かけるという良い習慣になった]「活動日を心待ちにしており、当日はとにかく行きたがりました。また、(A c t. の活動では) 学校での様子と大きく違うようで、いつもよりも地が出ていた」とのことだった。

なお、自由記述として、「できれば来年もこの時期にやっていただけたらうれしい]、「A c t. は来年度も継続してほしいです。私もですが、子供達が来年もあつたら行きたいといっている]、「体を思いっきり動かすことが、健やかな生活には大事なんだと改めて感じた。A c t. が休みの間の生活のリズムがどうなるかととても不安」などの要望等があった。総じて、保護者からは、「A c t.」の活動目標の実現についての手ごたえや賛意が寄せられた。

表1 保護者アンケートの回答一覧

質問	選択肢 [回答者数]	回答
Q1 A c t. に参加してよかったですか。	・はい【5】 ・いいえ ・どちらともいえない	理由： ・同じような性質の子どもたちと楽しい時間を過ごせた。(親も) ・スタッフの方々の子供たちに対する対応のよさの中安心してスポーツに取り組めたこと。 ・いつもと違う子どもの表情が見れた。 ・走ることがあまり得意でないのにA c t. では楽しそうに走っていたし、毎回楽しみにしていたので。
Q2 A c t. に参加される以前のことをうかがいます。お子さんの、放課後の生活の様子は、いかがでしたか。		・体を持てあまし、遠くまで出かけてトラブルがあった。 ・学校生活に適応できずに悩んでいたのも、放課後も疲れから家の中で一人で遊んでいました。生活にメリハリがなかったように感じます。 ・体を動かして遊ぶことはめったにありませんでした。家に帰ってすぐ宿題を始めても、集中して勉強できないのでしたらだと23時頃まで続けるときもあります。 ・帰宅してもテレビ、ゲーム、読書、絵を描くといったことばかりで、体を動かす機会がほとんどありませんでした。 ・なかなか活動できる事や場がなく自宅で過ごすのみでした。周りの活動についていけなくなっていくにつれておやつを食べたがるようになってきました。
Q3 A c t. に参加されてから、お子さんの活動日や活動時間の前後の様子はいかがでしたか。		・待ち遠しいようで生活にメリハリができました。 ・次の活動が待ち遠しくてたまらない様子で、あと何日と、指折り数える毎日でした。A c t. に行くために学校もがんばって行き、宿題も終わらせると自分から(出発の準備)行動しました。翌日は本当に元気に登校する姿が見られました。 ・A c t. の日は帰ってすぐ宿題を始めるのですが、楽しみにしているからか、集中して早めに終わらせようとがんばります。 ・A c t. に参加し始めた頃は宿題を終えてから出かけるという良い習慣になっていました。夜はすぐ寝るだろうと思っていたら楽しい気持ちが続いているせいいつもより遅かった。 ・活動日を心待ちにしておりまして、当日はとにかく行きたがりました。また、学校での様子と大きく違うように思われました。いつもよりも地が出ておりました。
Q4 A c t. の活動についてうかがいます。活動の期間(7月~10月まで)について、いかがですか。	・ちょうどよい【4】 ・過不足あり【1】* ・どちらともいえない	理由、ご要望： ・水泳もやっているのですが、この期間は休みなのでちょうどいいです。 ・通年開催を希望。せめて5月~11月ではいかがでしょうか。* ・寒いのは苦手です。 ・この活動期間は小学校も特に行事がないのでちょうどよい時期だと思う。
Q5 活動の頻度(隔週1回)について、いかがですか。	・ちょうどよい【5】 ・過不足あり ・どちらともいえない	理由、ご要望： ・下の子がいるので、毎週はどうか?という感じですが。 ・子供は毎週を希望していますが、家庭の都合を考えると隔週1回が負担なくよいと思います。
Q6 活動の時間帯(5時半~7時)について、いかがですか。	・ちょうどよい【3】 ・過不足あり ・どちらともいえない【2】*	理由、ご要望： (1) もう少し早い時間帯とよい。* (2) 待ちきれないので5時からでも良いと思いますが、スタッフの都合等もあるので仕方ないかなと思います。* (4) 距離(自宅からの移動)を考えるとうちには良い時間帯です。

発達障害児に対する放課後活動「A c t .」の実践報告

Q7	活動の場所について、いかがですか。	<ul style="list-style-type: none"> ・ちょうどよい【5】 ・過不足あり ・どちらともいえない 	理由、ご要望： <ul style="list-style-type: none"> ・比較的近いのでいい。 ・何かとご縁のある場所なので子どもも安心できると思います。
Q8	活動の経費について、いかがですか。	<ul style="list-style-type: none"> ・概ね適切【4】 ・過不足あり【1】* ・どちらともいえない 	理由、ご要望： <ul style="list-style-type: none"> ・安くてなんだか申し訳ないくらいです。スタッフの方々ありがとうございます。* ・かえって安くいらだと感じました。
Q9	活動のサポート体制(スタッフの人数やかかわり)についていかがですか。	<ul style="list-style-type: none"> ・概ね適切【4】 ・過不足あり【1】* ・どちらともいえない 	理由、ご要望： <ul style="list-style-type: none"> ・一人一人を受け入れつつ指導していただいているようで。 ・期間の後半はスタッフの人数が増えました。子供2人に対してスタッフ1人いればさらに安心です。* ・仕事の後のスポーツは大変だと思いますが、子供たちのために活動して下さってありがとうございます。
Q10	活動内容(タグラグビー)について、お子さんの放課後活動としていかがでしょうか。	<ul style="list-style-type: none"> ・概ね適切【5】 ・過不足あり ・どちらともいえない 	理由、ご要望： <ul style="list-style-type: none"> ・学年問わずできるスポーツなのでいいと思います。 ・子のお子さんも楽しんでいて感じました。個々のペースで体を動かせるので良いと思います。 ・体を動かして遊ぶことがないので本人もたくさん動いて楽しかったみたいです。 ・子どもたちが楽しんでやっているので良いと思う。
Q11	今後の活動についてのご意見、ご要望について、何なりとお書きください。	<ul style="list-style-type: none"> ・できれば来年もこの時期にやっていただけたらうれしいです。 ・活動内容を大きく変えることはないと思います。また、子供同士もなれてきたのでそれぞれの個性も目立ってきたように思います。多少チームメイトへの不満を口にするこも出てきたのでコミュニケーションの面でのサポートを必要になってくるのでしょうか。 ・A c t . は来年度も継続してほしいです。私もですが、子供達が来年もあったら行きたいといっているのです。 	
Q12	その他、ご自由にお書きください(お子さんの生活のことでお考えのことなど)	<ul style="list-style-type: none"> ・体を思いっきり動かすことが、健やかな生活には大事なんだと改めて感じました。A c t . が休みの間の生活のリズムがどうなるかとても不安です。A c t . の活動を始めてくださり本当に有難うございました。スタッフの方々にも感謝の気持ちでいっぱいです。A c t . 再開の時にはまた是非よろしく願います。 ・自信がないのか、ルールがいまいちわかっていないのか、タグラグビーを見ても積極的に動いていない感じがあります。自信を持たせるにはどうしたらよいか。 ・幼稚園のころを考えると、今は私も子どもも穏やかに生活できるようになったなあと思います。それは私達親子を理解してくれる方たちのおかげだと思います。将来的には自立した人間になってくれることを願いますが、焦らず自分のペースで成長してくれたらと思います。 ・まわりの子どもたちについていけない、自分で趣味を見つけて続けることが困難になりますと、どうしても食べることで楽しい時間を過ごそうとするようです。ですから、A c t . のような活動に参加させていただいてありがたかったです。また、どんなに子どもの弱い点がありましても、ご理解いただけるのでとても心強かったです。 	

② 活動実績

「A c t .」は、隔週1回、木曜日の放課後(17時30分～19時)に開催し、「シーズン制」と称して、通年開催ではなく数か月間の開催期間を定め2010年から2012年度までの3年間実践を持続した。したがって、開催期間の始終はそれぞれ「シーズンイン」、「シーズンオフ」と称した。

活動内容として、体育館を借用しての「タグラグビー」に取り組んだ。これは、言わばラグビーの簡易普及版であり、2011年実施の小学校の新学習指導要領でも取り上げられている「陣取りゴール型」の競技である。タグラグビーは、①低学年の学習経験から発展させやすい。②どの子ども、今もっている力で楽しめ、やさしい学習を導きやすい運動、③ゲームへの参加から豊富な運動量がもたらされる。攻守問わず運動量と、多様な動作が含まれる。④個人差や男女差が顕在化しにくい運動といわれる¹⁹⁾。また、「A c t .」の参加者にとっては競技経験がないだけに、予めの苦手意識などが無い状態で始められることや、エブリ教室において先行的に取り組まれている²⁰⁾ために支援方法を参照できることもメリットだと思えた。また、タグラグビーは1チームを5人編成とするが、「A c t .」では、1チームを参加児童3名とスタッフが2名で編成した。スタッフは、プレーヤーとして参加児童と共にプレーをしつつ、戦略の企画やチーム練習の進行などチーム運営に努めた。

なお、タグラグビーの概略は次の通りである。

- ・1チームを5名で編成する。プレーヤーは、タグを腰の両側につける。
- ・攻撃では、ボールを持ってゴールラインを踏み越える「トライ」と称するプレーで得点と

なる。

- ・パスは、横または後ろにいる味方に行く。前にパスを出すと「スローフォワード」という反則になる。
- ・守備では、ボールを持っている相手のタグを獲る「タグ」と称するプレーで相手の進行を止める。タグを獲られたプレーヤーは、その位置から味方にパスを出してプレーを再開する。
- ・得点した場合やタグを5回連続で獲られた場合、ルーズボールを獲られた場合などには攻守交代する。
- ・その他、ゲームの細部においては、会場の物理的な制限や、参加児の様子に合わせてタグラグビーの競技としての独自性を損なわない程度にルールの変更やアレンジを施した。参加児の様子に合わせたルールの変更には、不慣れさに応じた軽減的で配慮的な変更もあれば、プレーの成熟に応じた発展的な変更も含んだ。そもそも、タグラグビーは、単純なだけに臨機応変に「ローカルルール」を作りやすい²¹⁾。

「A c t .」の活動実績について、表2に一覧した。2010年度は、7月から10月までの期間とし、全7回実施した。最終回には、エブリ教室との交流試合を企画し、それに向けて期間中盤以降には練習試合を企画した。練習試合は、ゲストチームと称する急造チームを編成し実施した。このメンバーは、毎回筆者らが周囲に呼びかけ5名の学生有志、教員有志を募った。

2011年度は、7月から10月までの期間とし、全7回実施した。最終回には、エブリ教室との交流試合を企画し、それに向けて期間中盤以降には練習試合を企画した。

2012年度は、6月から9月までの期間とし、全8回実施した。最終回には、エブリ教室との交流試合を企画し、それに向けて期間中盤以降には練習試合を企画した。全体のスケジュールを前倒しにしたのは、参加者の小学校行事との重複を避けるためだった。

エブリ教室との交流試合は、一進一退のハードなゲームとなり大いに盛り上がった。シーズンごとに目的意識が強まり、定着した。ナオヤ君はじめ参加者は口々に「来年もやるんですね」とか「今年は勝ちたい」と語り、交流試合を楽しみにしていた。

表2 活動実績

年度	回数	活動日	活動内容 (タグラグビーの通常練習以外内容のみ記載)	参加人数			備 考
				子ども	保護者	スタッフ	
	1	7.1.	初顔合わせ、チーム決め、日程等の確認	6	6	4	
	2	7.15.		5	5	5	
	3	8.26.		6	5	4	2回目と3回目の間は、小学校の夏休み期間のため、活動を休止した。
2010	4	9.9.	ゲストチームとの練習試合	6	6	6	ゲストチームは、スタッフの呼びかけに応じた有志5名によって編成した。
	5	9.24.		6	6	4	
	6	10.7.	ゲストチームとの練習試合	6	6	9	ゲストチームは、スタッフの呼びかけに応じた有志5名によって編成した。
	7	10.23.	エブリ教室との交流試合	3	3	5	エブリ教室の開催日にあわせて、土曜日開催とした。

発達障害児に対する放課後活動「Act.」の実践報告

	1	7.7.	チーム決め、日程等の確認	4	4	4	
	2	7.21.		6	5	4	
	3	8.18.		6	5	4	2回目と3回目の間は、小学校の夏休み期間のため、活動を休止した。
2011	4	9.15.		6	4	4	
	5	9.29.		6	5	4	
	6	10.13.	ゲストチームとの練習試合	6	5	8	ゲストチームは、スタッフの呼びかけに応じた有志5名によって編成した。
	7	10.22.	エブリ教室との交流試合	3	3	4	エブリ教室の開催日にあわせて、土曜日開催とした。
	1	6.14.	チーム決め、日程等の確認	7	5	4	
	2	6.28.		7	5	4	
	3	7.12.		6	4	5	
	4	7.26.		5	4	5	
2012	5	8.23.		6	4	2	4回目と5回目の間は、小学校の夏休み期間のため、活動を休止した。
	6	9.6.	ゲストチームとの練習試合	6	4	9	ゲストチームは、スタッフの呼びかけに応じた有志5名によって編成した。
	7	9.20.		7	5	4	
	8	9.23.	エブリ教室との交流試合	7	6	4	エブリ教室の開催日にあわせて、土曜日開催とした。

さて、活動の評価として、保護者アンケートの回答から該当箇所を挙げる。保護者には次の3つの質問項目をもって尋ね、以下のような回答を得た。

第一に、「質問項目:活動の期間(7月～10月まで)について、いかがですか」をもって尋ね、「水泳もやっているのですが、この期間は休みなのでちょうどいい」、「この活動期間は小学校も特に行事がないのでちょうどよい」などの好意的な回答を得た。また、「通年開催を希望。せめて5月～11月ではいかがでしょうか」との発展的な要望をいただいた。

第二に、「質問項目:活動の頻度(隔週1回)について、いかがですか」をもって尋ね、「子供は毎週を希望していますが、家庭の都合を考えると隔週1回が負担なくよい」などの回答を得た。

第三に、「質問項目:活動の時間帯(5時半～7時)について、いかがですか」をもって尋ね、「距離(自宅からの移動)を考えるとうちには良い」、「待ちきれないので5時からでも良いと思うが、スタッフの都合等もあるので仕方ない」との回答を得た。各家庭の個別的な状況が反映されているようだったが、賛意または許容の範囲と理解できた。

③ 各回の活動展開

各回の活動展開について、タイムテーブルとして表3に示した。基礎的な技能にかかわるドリルに時間を費やすよりも、ゲームへの時間配分を優先させた。また、活動期間開始時からチーム編成を固定し、ゲームを繰り返した。その経過中において、参加者の特徴に合わせた役割分担やプレー内容を検討、決定し、ゲームでの発揮と定着を図った。

なお、ここでは、参加者の特徴はブレススタイルと称し、「障害特性」というニュアンスを排した。そして、スタッフは、共にプレーするチームメイトとしてかかわる。そのかわりとしての支援内容や方法は、特別支援というよりも、あくまでもタグラグビーとしての自然さと必然さを伴い、かつ、一人一人の最善のプレーを支える「ナチュラルサポート」であることを心がけた²²⁾。例えば、捕球が苦手な子どもであれば、スタッフは手渡しでのパスを行うが、これは、特定の局面で最も有効な戦術として取り組む。少なくとも第三者が活動を見たときに「捕球が苦手だから、手渡しのパスをしている」と解釈されるようなシーンにしないことがスタッフの支援上の哲学だった。

表3 Act. のタイムテーブル

時 間	活 動 内 容	
17:00	スタッフミーティング	会場設営や活動内容の確認を行う。
17:30	児童集合、身支度	ホワイトボード(メンバー表)に記名した後、用具(タグベルト、タグ)を身につける。
17:35	ウォーミングアップ	ランニング、準備体操、スキルドリル(パス&ランなど)を行う。
17:45	チーム練習	チームでの戦略の打ち合わせを行う。
18:00	ゲーム	8分ゲーム、2分休憩を4セット行う。休憩時には、水分補給をする。また、必要に応じて、チームでの戦略の確認などを行う。
18:40	クールダウン	ランニング、整理体操、感想交流、清掃ののち、解散する。
19:00	スタッフミーティング	会場撤去を行う。その後、活動について、児童の様子や支援方法などについての情報交換等を行う。

④ 活動の逸話

参加者の個別の目標及びその実現状況として、ナオヤ君の守備プレーに関する逸話を挙げる。

ナオヤ君は、運動量豊富で技術的にも高いプレーヤーである。守備では、相手チームのボール保有者(ボールキャリア)に素早く詰め寄り、執拗に相手を追いかけてそのタグをとる縦横無尽の活躍だった。しかしその様子は、ナオヤ君自身にとっては発散的であり心地良いものだったが、チームにとっては一過的でもあった。つまり、ナオヤ君が抜かれてしまうとその後の対応をチームメイトが慌ただしく、しかも数的不利な状況(守備の人数が攻撃の人数よりも少ない状況)ですることになった。相手チームの攻撃のレベルが上がるにつれて、ナオヤ君のワンマンプレーはチームとしての安定的な守備力にはなりにくく、ナオヤ君にはチームワークというテーマへの関心を喚起したいところだった。

そこで、仲間と守備プレーの意図を戦術的な観点で共有し、効果的なプレーにしていくことが必要だろうと考えた。一方で、ナオヤ君の持ち前の運動量を存分に発揮することも両立させたいと考えた。具体的には、次のような手立てを講じた。

・守備陣形を、前衛と後衛に分け、ナオヤ君には後衛(「フルバック」)を担当することにした。

発達障害児に対する放課後活動「Act.」の実践報告

- ・前衛を担当するチームメイトが、相手のボールキャリアに詰め寄り、その進行方向を限定させたところを見計らって、ナオヤ君が動き出しタグを狙うという役割分担をした。
- ・チーム練習の時には、守備におけるチームワークとして、この守備陣形の狙いや各役割の意味や留意点を確認しあった。また、局面を想定した実技練習にて確認しあった。ナオヤ君には、ゴール前の最重要ポジションであること、状況判断が重要であり、チームメイトの動きをよく見て状況判断することが重要であることを確認しあった。
- ・ゲームにおいてはスタッフが必要に応じて随時の声掛けをしたり、プレーの成果や状況判断の適切さなどをフィードバックしたりした。

ナオヤ君は、自チームの攻撃が終わると即座に、後衛の守備位置であるゴールエリア前に駆け戻り備えた。「前衛」のチームメイトが追い詰めるボールキャリアの動きを見極め、相手のタグをゴール直前で獲り、相手のトライを幾度も阻んだ。時には、相手チームの戦術として用いられた、コートを横断するパスに合わせて素早く逆サイドに駆けもどるなどの緊迫した対応もあった。ナオヤ君には、広い視野をもった状況判断と、相手との距離を自身の走力との兼ね合いで随時検討し最適化を図る判断などを求められたが、それらを遺憾なく発揮し、確かなチームワークを担った（図1参照）。



図1 「フルバック」におけるナオト君のプレー（本図は、文献²²⁾から転載し、脚注を付した)

ある時、ナオヤ君の小学校の担任が活動を参観した。当時学校では萎縮し、緊張しきっているナオヤ君が発散的に、終始笑顔で活動する様子を目の当たりにし、保護者と共に喜んでくださった。

⑤ 終結、解散後の対応

「A c t .」は、2010年度から2012年までの3年間開催し、終結、解散した。

そもそも、「A c t .」の立ち上げを構想した段階から、運営者たる第一筆者の勤務日、時間、繁忙期などの影響や、近年中に想定された筆者らそれぞれの所属の変更などの不安定要素があり、時限的な条件の中での運営を構想せざるを得なかった。そこで、「A c t .」を他の支援団体の活動と同様の通年開催ではなく、数か月間の期間を定めた「シーズン制」による開催にしたり、新規参加者を募らないことを原則とし、この参加者限定の放課後活動として展開したりすることにした。

また、筆者らは、「A c t .」の立ち上げの契機となったナオヤ君をある意味で象徴としており、ナオヤ君が小学校を卒業するまでは持続したいと願った。第一筆者の所属の変更が決まった2012年度は、まさにナオト君の小学校卒業の年度でもあった。それは同時に、この参加者が一緒に活動することが可能な期限でもあった。筆者らは、この顔ぶれでの活動を可能な限り実現しきったことと解釈し、「A c t .」を終結、解散した。

なお、2013年、中学生になるナオヤ君を含めた2名は、中学生以上の年代が集う休日活動「エブリクラブ」²³⁾に移籍し、タグラグビーを継続できるようにした。また、小学生である他4名は、エブリ教室に移籍し、そこでタグラグビーを続けることにした。

(3) 運営の状況とその評価

第一筆者は、「ヒト」(人的資源)、「モノ」(物理的資源)、「カネ」(経済的資源)、「コト」(情報的資源)の4観点を提起し、運営状況の記述を試行している^{24) 25) 26)}。ここではそれに従って、「A c t .」の運営状況を以下のように整理し、筆者らスタッフによる自己評価と保護者による評価(アンケート回答に基づく)を付した。

① 「ヒト」(人的資源)

ここでいう「ヒト」とはスタッフのことである。第一筆者が運営を担う中核スタッフであり、保険手続き、保護者連絡、活動の全体計画、会計、用具の調達、会場の確保を行った。

実働スタッフとして、第二筆者、第三筆者が固定的に参加した。また、ある参加者の兄や、第一筆者の同僚、第二、第三筆者の学友有志がスタッフとして参加した。流動的な参加であっても随時4名のスタッフの参加が得られた。

活動中は、2チームを編成し、各チームにスタッフが2名入り、3人の子どもたちとプレーを共にしながら活動を支援した。また、第一筆者はプレーをしながら審判を兼ねて行った。

以上から、「ヒト」についての評価として、筆者らは実践上必要十分と考えた。また、保護者の評価は、「質問項目：活動のサポート体制(スタッフの人数やかかわり)についていかがですか」をもって尋ね次のような回答を得た。「一人一人を受け入れつつ指導していただいている」など質的側面については好評だったが、「子供2人に対してスタッフ1人いればさらに安心」と量的側面についての要望があった。

② 「モノ」(物理的資源：活動の場、用具)

活動の場としての会場は、第一筆者の所属の特別支援学校が管轄する体育館であった。内情

発達障害児に対する放課後活動「A c t .」の実践報告

を知るだけに使い勝手もよく、得点板やタイマーなどの備品も借用できた。また、借用手続きなども円滑に行うことができた。活動日に合わせて、確保できた。各家庭からの交通の便もよかった。

用具については、タグラグビーを実施していたエブリ教室の備品を借用した。これは第一筆者が管理するものであり、確実かつ円滑だった。

以上から、「モノ」についての評価として、筆者らは実践上必要十分と考えた。また、保護者の評価は、「質問項目：活動の場所について、いかがですか。」をもって会場に関することのみを尋ね、「比較的近いのでいい」、「何かとご縁のある場所なので子どもも安心できる」との好意的な回答を得た。

③ 「カネ」（経済的資源：活動資金）

活動資金は、参加者からの集金で賄った。初年度、子ども一人につき毎回300円とし、6人×7回×300=12600円と試算した。支出内容としては、保険（約4000円）、おやつ（約2000円）、会場・事務・通信・用具（約3000円）があった。活動期間の終盤になると、余剰金が予測されたために、集金額を減じて調整した。結局、実際の集金額は9000円だった。二年目以降も活動期間の終盤に金額を調整する方法で運用した。なお、スタッフの立て替え払いの期間が生じてしまうことへの課題意識はあったが、確実に回収できるとの見通しがあったために許容することにした。

以上から、「カネ」についての評価として、筆者らは実践上必要十分と考えた。また、保護者の評価は、「質問項目：活動の経費について、いかがですか」をもって尋ね「安くてなんだか申し訳ないくらい」との好意的な回答を得た。

④ 「コト」（情報的資源：活動の内容）

活動内容をタグラグビーに特化した。現時点でもマイナーな競技であるがゆえに参加者及びスタッフいずれもが過去の競技経験を問わず、先入観なく対等に取り組める内容でもあった²⁷⁾。また、毎回ほぼ同一の活動内容であるために、活動の事前準備はほとんどなく、スタッフの労力を抑えることができた。また、その内容及びその展開方法は、エブリ教室で開発されたものを借用したことで、各回の展開をスムーズにすることができた。また、活動の反復によって参加者の技能が高まるなどの成果もあり、対外試合などの発展的な活動も見込めた。

以上から「コト」についての評価として、筆者らは実践上必要十分と考えた。また、保護者の評価は、「質問項目：活動内容（タグラグビー）について、お子さんの放課後活動としていかがでしょうか」をもって尋ね、「学年問わずできるスポーツなのでいい」、「個々のペースで体を動かせるのでいい」、「体を動かして遊ぶことがないので本人もたくさん動けて楽しかったみたい」など好意的な回答を得た。

4 考 察

（1）実践の意義

「A c t .」は、ナオヤ君にとって放課後活動が必要であろうという見立てを発端とした。そして、同様のニーズを有する6名が集い活動した。参加者の放課後を、楽しくやりがいのある時間にすることを目標とし、毎回の活動中での支援に努めた結果、目標実現の要件として想定した三点、①確かな目当て・見通しを持ち仲間とテーマを共有すること、②一人ひとりが自分

の力で活動し仲間と共に取り組むこと、③存分に活動し、満足感・成就感を分かち合うこと、の実現が参加者それぞれにあった。このことは、結果として「A c t.」が参加者にとって、楽しくやりがいのある時間になったと解釈できる。保護者アンケートの回答はこれを補強した。また、参加者が、3年間「A c t.」の活動に足を運び続けたこと、解散後もエブリクラブやエブリ教室への移籍によってラグビーを継続したことから参加者の意欲がうかがえる。これも補強材料の一つだろう。

以上から「A c t.」の実践は、放課後活動としての意義を有したと考える。

(2) 持続可能な運営のために施した工夫点

「A c t.」の運営においては、上記した時限的な事情から、立ち上げ当初から持続可能な運営デザインが求められた。そこで施した工夫点のキーワードは「特定」であった。

第一に、開催時期の特定である。これは通年開催ではなく、一時期を特定した「シーズン制」による開催だった。

第二に、活動内容の特定である。活動内容をラグビーに絞り込んだことで、会場や用具、活動計画などを単一化し、その結果として運営業務を単純化できた。このことで運営上のコストパフォーマンスを抑えることになった。また、反復的な活動によって、参加者の習熟があり、支援の精度も高まり、発展的で見通しの効く活動を実現した。

第三に、参加者の特定である。他の支援団体の状況では、随時新規参加者の募集や受け入れを行うことが多いが、「A c t.」では、現状の参加者への対応のみを目指した。換言すれば、前者は不特定多数を想定しているのに対して、「A c t.」は特定少数を想定した。不特定多数を想定すれば、必然的に活動の持続は、恒常性を追求することになる。特定少数を想定すれば、そこでのニーズが充足されること、充足されるまでが持続を必要とし追求する期間として特定しうる。すなわち、持続可能性の追求とは、恒常的な持続を自明視するものではなく、操作的に設定された期間においてなされるものという発想である。結果的に「A c t.」では、このような時限的な運営モデルを新たに提起することになった²⁷⁾。

以上から「A c t.」の運営は、その時限的な事情から自然かつ必然的に持続可能な運営のための工夫点が産みだされ、実践を下支えしたと考える。

今後、本稿が他の支援団体の実践的な価値に相応しい持続可能な運営のための一助となれば幸いである。

謝 辞

本稿の執筆並びに放課後活動「A c t.」の実施に際して多くの皆様からご理解とご協力を賜りました。活動にご参加くださった皆様、保護者の皆様、スタッフやゲストチームとしてご協力くださった皆様、会場の借用にてお世話くださった皆様、交流試合にて鏝を削ったエブリ教室の皆様。そして、「A c t.」のきっかけをくださったナオヤ君（仮名）と保護者様、当時小学校でナオヤ君の支援に携わった先生方。ここに記して感謝申し上げます。

発達障害児に対する放課後活動「A c t .」の実践報告

<引用文献>

- 1) 障害のある子どもの放課後保障全国連絡会 (2011) : 障害のある子どもの放課後活動ハンドブック, かもがわ出版.
- 2) 川上敬二郎 (2011) : 子どもたちの放課後を救え!, 文藝春秋.
- 3) 佐々木全, 三田敏明 (2014) : 発達障害のある児の放課後・休日の実態調査—岩手県内の支援グループ参加者に対するアンケートから—, はなまき軽度発達障害児の教育と生活を支援する会, 年報花童・風童, 10, 30-36.
- 4) 佐々木全, 佐々木章, 安部千恵子, 三田敏明 (2009) : 軽度発達障害児に対する「S S T教室あじっこ」の実践報告, L D研究, 18,2,147-154.
- 5) 佐々木全(2009) : 発達障害児 (者) に対する, インフォーマルな支援グループの取り組みに関する検討—岩手県における「通所支援教室」の成果と課題—, 発達障害研究, 3 1, 2,125-134.
- 6) 佐々木全, 高橋祥子, 三田敏明 (2011) : 軽度発達障害児に対する「わくわく教室」の実践報告, L D研究, 20(1),109-120.
- 7) 佐々木全, 名古屋恒彦(2014) : 高機能広汎性発達障害者に対する「エブリクラブ」の実践に関する報告 (第3報) —実践論と運営論の包括的検討にむけた予備的研究—, 岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要,13,215-223.
- 8) 佐々木全, 三田敏明(2009) : 地域の市民活動による, 軽度発達障害のある児に対する休日活動提供の現状—岩手県内3つのグループによる「通称支援教室」の運営上の課題, 日本発達障害学会第44回大会発表論文集,180-181.
- 9) 森野勝代, 吉田美恵, 新堀紘太郎, 栗野健一 (2004) : L D親の会に集まる人々とは—関東ブロック専門委員会による親の会自己分析の試み1—, L D研究,13,1,33-41.
- 10) 森野勝代, 高橋由美, 井上芳郎, 栗野健一 (2004) : L D親の会にできることとは何か—関東ブロック専門委員会による親の会自己分析の試み2—, L D研究,13,1,43-52.
- 11) 木谷秀勝 (2008) 発達障害児への地域・家族支援の可能性を探る—長門市の発達障害児親の会「ブルースター」の活動から—, 山口大学教育学部副教育実践総合センター研究紀要, 26, 147-155.
- 12) はなまき軽度発達障害児の教育と生活を支援する会, (2013) : 花巻発青年たちの「包括的支援モデル」をどうする!?, はなまき軽度発達障害児の教育と生活を支援する会, 年報花童・風童, 9, 32-45.
- 13) 佐々木全, 加藤義男 (2007) : 高機能広汎性発達障害児に対する「エブリ教室」の教育実践に関する報告 (第七報) —今日的観点からの検討—, 岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要,6, 165-181.
- 14) 加藤義男(1993) : 学習障害 (L D) 児の現状と課題に関する一考察—通所指導教室の実践を通して—, 岩手大学教育学部研究年報,53,1,123-138.
- 15) 佐々木全 (2002) : 「なづな教室」における実践報告- 言語の遅れを伴うA D H D児の特性に応じた指導-, L D研究, 11, 1,32-40.
- 16) 森山貴史 (2008) : L D等のある子どもを対象とした学校外通所支援教室における放課後支援に関する研究, 岩手大学大学院教育学研究科修士論文.
- 17) 名古屋恒彦(2002) : 生活中心教育入門, 大揚社.
- 18) 佐々木全, 加藤義男 (2011) : 高機能広汎性発達障害児に対する「エブリ教室」の教育実践に関する報告 (第13報) —ねがいの実現状況と, 支援方法の関係性に着目して—, 岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要,10,211-220.

- 19) 鈴木秀人(2009)：公式BOOK だれでもできるタグラグビー，小学館。
- 20) 佐々木全,加藤義男（2010）：高機能広汎性発達障害児に対する「エブリ教室」の教育実践に関する報告（第11報）－単元「タグラグビー」における実践的検討－,岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要,9,175-190.
- 21) 杉田正樹(2010)：教育のツールとしてのタグラグビー，人間環境学会「紀要」，14,17-32.
- 22) 佐々木全,今野文龍,名古屋恒彦(2013)：高機能広汎性発達障害児に対する「エブリ教室」の教育実践に関する報告（第17報）－参加児の活動経過及び心的過程の変遷に着目したタグラグビーにおける支援内容と方法の検討(2)－,岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要,12,299-312.
- 23) 佐々木全（2016）：高機能広汎性発達障害者に対する「エブリクラブ」の実践に関する報告（第4報）－実践状況及び運営状況の変遷とそれらにかかる包括的検討－,岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要,15（投稿中）
- 24) 佐々木全（2012）：発達障害児（者）に対する「本人活動」における運営実態－岩手県内8グループを対象としたアンケート調査から－,はなまき軽度発達障害児の教育と生活を支援する会,年報花童・風童,8,27-41.
- 25) 佐々木全（2012）：「A c t .」の運営状況,はなまき軽度発達障害児の教育と生活を支援する会,年報花童・風童,8,42-43.
- 26) 佐々木全（2014）：「エブリの会の運営状況」の運営状況はなまき軽度発達障害児の教育と生活を支援する会,年報花童・風童,10,28-29.
- 27) 佐々木全（2015）：発達障害児者を対象とした支援活動における持続可能性追求について～岩手県内2つの支援団体における運営状況の比較検討から～,日本発達障害学会第50回研究大会発表論文集2015,79.